＜体育コース　小学生への出前交流授業～スポーツ教室～＞

滋賀県立伊吹高等学校

1　はじめに

本校は今年（平成 14 年度）で創立 20 周年を迎えた全日制普通科高校である。近畿で最も北東に位置する学校であり、平成 12 年度の入学生から「体育コース」「学力発展コース」「学力充実コース」を設定し、特色ある学校を目指している。1 学年５クラスの小規模の学校であるが、早朝補習や、朝練習で生徒の半数が 7 時半には登校してくる活気ある学校である。

2　体育コースについて

体育コースは３年前に設置した。２、３年は単独クラスとなったが、１年は希望者が２６名であったため学力充実コースとのミックスクラスとなった。来年度は新２年生の希望者を入れ、単独になる予定である。単位数は本年度卒業生で 13 単位（1 年　体育理論 2 単位、2 年　体育演習 4 単位・フィットネス 2 単位、3 年　専攻スポーツ 2 単位・生涯スポーツ 3 単位）が増加単位である。６つの強化指定部、陸上・ホッケー・野球・サッカー・男子バレー・女子バスケット（平成 14 年度より）があり、これらの部に入ることを義務付けている。

コースとして「スポーツは、人を豊かにすてきに成長させる。」をモットーに以下の 3 つの目標を掲げている。

① スポーツを科学的にとらえ、強健な体力と高度なスポーツ技能を身につける。

② トップアスリートにふさわしい豊かな人間性を培う。

③ 生涯スポーツに視点をおき、地域社会のリーダーとして活躍できる資質を養う。

3　本年度テーマと＜体育コース　小学生への出前交流授業～スポーツ教室～＞について

（1）テーマ『行事や事業を通して、小・中学生との交流活動のあり方を探る』

（2）ねらい　生涯スポーツの地域リーダーとして活躍できる資質を養うため、小学校での出前交流授業～スポーツ教室～を実施し、地元小学生との『生きた交流体験』を通して、実施プログラムの構成の仕方や児童への接し方等を学ぶ。

（3）体験活動への経緯

小学生等の指導について

ホッケー部などのクラブ単独では以前から実施されてきた実績はあるが、教師の指導のもとで生徒がえるというものであった。平成１０年から平成１２年まで滋賀県指定の小中高連携事業において、伊吹山登山(小学生と本校の１年生、PTA の協力を得て、伊吹山３合目での自然体験学習と山頂登山および、ボランティア

としての清掃作業等)や部活動（陸上部の西小学校での指導や、大東中学校体育祭での模範演技等の参加、ホッケー部の地元中学校での指導）等の交流が行われてきた。

（4）計画等について

① 計　画

体育コースの完成年度であり、３年生の「生涯スポーツ」では、ゴルフを中心としたレクレーション的なスポーツの学習と同時に、将来の指導者を目指した授業展開を模索してきた。その過程で本校のこれまでの取組みを踏まえて、小学生を対象とした、生徒が行う「出前交流授業～スポーツ教室～」を計画した。近隣の大原小学校と交渉・協議の結果、６年生５９名に対して交流授業を行うことになった。本年度は６月３日、９月３０日、１１月１１日の３回の実施計画案を作成した。

② 問題点等

当初、小学校教員に、カリキュラム上の位置付けや、高校生が教えることについて、若干の不安が認められたが、小学校教員との協議の中で相互理解を得るようにした。

③ 教育課程上の位置づけ

学校設定科目「生涯スポーツ」の中に位置づけている。なお、単位数は３単位である。

陸上競技の指導風景

④ 評価方法について

事前指導（指導案作り・模擬授業）、実技指導（実技）、総括（まとめ）について、自己評価およびグループ内での相互評価を参考にして、全体を通しての評価をした。特に工夫や改善を重ねる努力を重点的にみた。

4　活動の概要について

（1）事前の活動

小学生を、5 種目のスポーツのうち、希望によってグループ分けを行い、事前の準備を下記のように実施した。

＜１時間目＞小学生にスポーツ教室をするということを説明し、5 時間分の授業展開を想定して、生徒が個別に指導案作りを行った。

野球の指導風景

＜２時間目＞その後２～３人のグループで再度指導案を検討し、それぞれのグループが授業内容を説明し、最終的に種目ごとの指導案を完成させた。

＜３、４時間目＞生徒役（他種目の生徒）と参

観役を仕立てて、１０分から１５分の模擬授業を展開した。相互に意見交換をさせた後に再度指導案を作成し直した。

＜5、6、7時間目＞その上でもう一度模擬授業を行い、ビデオを撮った。自分達の授業についての反省とそれをもとにした指導案を完成させ、話し方や挨拶、自己紹介、説明の仕方等に笑顔とユーモアを忘れないように指導し、実際場面で想定されるハプニング等の対処について指示を与えて授業に臨ませた。授業の導入が最も大切になることから、導入の仕方について配慮するように指示した。

サッカーの指導風景

（2）交流授業〈1回目交流　6月3日〉

ゲーム形式やリーダーのユーモアある自己紹介や指示により、スムーズな導入であった。生徒の感想によると、あっという間に６０分が過ぎていったようであった。児童の感想文によると、ほぼ全員が好意的に受け止め、是非とも続けて実施してほしいとの感想がほとんどであった。

バレーボールの指導風景

実施後、交流会の反省会をもち、運動嫌いの児童や積極的でない児童へのアプローチの仕方や、授業の時間配分や児童への細かい説明の方法や配慮方法、役割分担徹底の必要性など、多くの課題が明らかになった。これらの課題を踏まえて、指導案を作成し直し、２回目の交流に備えた。

〈2回目交流　9月30日〉

２回目の交流は大原小学校の新聞社取材やテレビ局の学校紹介のビデオ撮影等があり、日常とは異なる状況の中、天候も朝から雨が降る状態で、急遽本校と小学校の体育館(最終的に陸上だけが本校グランド)に別れての授業になったが、概ね成功だった。

２回目の反省を踏まえて、３回目の交流はすべてを本校の体育施設を使った授業を設定し、小学校側と協議の上、３回目に備えた。

ホッケーの指導風景

〈3回目交流　１１月１日〉

２回目と形態は同じように進めたが、前回よりワンステップ高いレベルでの実技指導となり、内容の濃い授業となった。小学生が高校の体育施設を使って高校生から授業を受ける画期的な授業が実現した。小学生からは今回で終わることを残念がる声や、なかなか帰ろうとしない児童もいて、まとめの授業も好評であった。

5　成果と課題　　『生きた体験』～『優しさ』を体験する活動

事前準備においては指導案作成や、模擬授業等、授業を作っていく過程でのリーダーシップ等を評価した。また、交流授業での説明や児童との関わり方等を２名の教員が評価したが、回を重ねるごとに実践力がつき、生徒の自信にもつながった。小学生との交流が深まっていくことで、授業内容も深くなり、向上していったことは高く評価できる。当初は指導技術習得を主眼においた効果を期待したが、何回か交流していくことにより、生徒の表情や言葉遣いに変化が見られるようになり、まさしく『生きた体験』～『優しさ』を体験する活動になったと考えられる。生徒の作文には「自分を見直すことができる授業であった。」「小学生と同じ目線でいることが大切であることがわかった。」という声が非常に多く、多くのことを学んだ活動でもあった。

児童に、何を、どのように、教えるのか悩んだり、また児童にわかりやすく教えるために、言葉を選んだり、口調を変えたりする練習をすることで、生徒にも明らかな成長が認められた。また、児童の感想文においても「ももを上げて走れば速くなるといわれ一生懸命あげました。」「もっとハードな練習もしてみたい。」「もう１回でいいから教えてほしい。」など、児童のスポーツへの意欲が高まったことは事実である。

しかし、生徒は楽しさに対する興味は高いが、危険認知に対する配慮にやや欠ける傾向がある。部活ごとの人数にかなり開きがあることも難しい問題である。また、同じ児童を相手にしたこともあり、3 回目には一部でやや慣れが出ていたことも否めず、来年度の取組みに向けての検討課題になる。

6　学校組織について

豊かな体験活動プロジェクトチームが中心となって、本活動のプログラムの構成や推進を行った。その前提には、全職員の共通理解があることはいうまでもない。

7　来年度に向けて

体育コースでは、本年度の成果と課題を踏まえて、来年度は、他の小学校にも出前授業ができないかと考えている。また「体育」以外の教科との連携も図っていきたいと考える。